

岩手の風土記シリーズ（20） 鬼死骸村を訪ねて

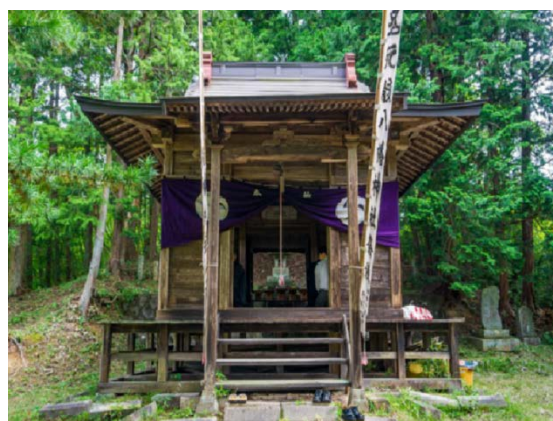
昨年来の「鬼滅の刃」ブームに乗って、今「鬼」が脚光を浴びている。あちこちに鬼伝説が存在する我が岩手県もそのブームにあやかりたいと思うし、鬼の霊力により何とか疫病退散を願いたいものである。さて過日、桜が満開を迎えた一関市の「真柴地区」を訪ねた。この真柴地区はかつて「鬼死骸村（おにしがいむら）」と呼ばれ、明治8年まで実在した村名である。今回はこの

「鬼死骸」のルーツを訪ねてみた。まず鬼死骸をインターネットで検索すると、吉村達也著「鬼死骸村の殺人」がヒットする。これはミステリー作家朝比奈耕作シリーズで、小泉孝太郎が主演してTVドラマにもなった。残念ながら鬼死骸村はTV化されなかったが、小説の舞台にもなった地名である。今回この



【現在の鬼死骸 Map】

鬼死骸村を訪ねたわけであるが、現在は存在しない村名であるので、まずはカーナビで真柴市民センターを入力して移動した。何とか市民センターに着いて、職員の方から情報を仕入れて、鬼死骸停留所というポイントを勧められた。ただしこの停留所は個人の私有地であるため、車を少し離れた所に駐車するよう強く注意された。ルートの的には鬼死骸八幡神社、真柴市民センター、鬼石、あばら石、バス停、バス停待合所の順番であろう。とにかく田園地帯の一角にあり、非常に分かりにくいところであった。鬼死骸停留所待合所にあったパンフレットには、「現在の鬼死骸 Map」がありわかりやすく示されているが、



【鬼死骸八幡神社】

一関から国道342号を花泉方面に南下するが、途中で旧道に行く必要があり、注意して車を走らせないと行き過ぎてしまうことになる。筆者も行き過ぎてしまい、戻ってきて何とかたどり着いた次第だ。この鬼死骸村というおどろおどろしい名前の由来は、時は

延暦20年(801年)坂上田村麻呂が東北遠征した時代にさかのぼる。この時この地区は大武丸(おおたけまる)という郷士(蝦夷の棟梁)が治めていた。大武丸は坂上田村麻呂軍に対して果敢に抵抗して戦った蝦夷の武将の一人である。しかし、烈戦の末に戦いに敗れてしまい斬首の刑に処された。この時大武丸の遺骸を埋めた場所に巨大な石を置いたという説、または、村人たちが地元の英雄の死を悼んで村の中心に遺骸を埋めたという説などがあるようだ。この遺骸を埋めた場所として「鬼石」と呼ばれるポイントがある。田んぼの中にひっそりとたたずんでいた。また鬼石から、500mほど離れた場所には、その時に飛び散った死骸の一部または一緒に戦った子分のものとされる石も存在し「あばら石」と呼ばれている。すなわち大武丸の亡骸(鬼の死骸)が埋めたとされる逸話に基づいて「鬼死骸村」と呼ばれるようになった。一方その時斬首された首は鳴子の鬼首(おにこうべ)に飛んで行ったという話もある。もっとも鳴子の地元民にすれば、鬼首の由来は別の説が有力とされている。当時朝廷軍にすれば、反抗する蝦夷の棟梁たちはすべて鬼と呼んでいたのであろう。類似した言い伝えに、土蜘蛛伝説があり当時の大和朝廷に恭順せず敵対した古代の「まつろわぬ人々」

へ向けた蔑称であるが、当時の蝦夷の人たちも同様であったのだろう。当時の蝦夷の人たちは、ひげもじゃで毛皮などを羽織っていたと推察されるため、都人(みやこびと)にとっては異様な形相で鬼に見えたのかも知れない。いずれにしても原住民であった蝦夷の民が、当時の朝廷軍に侵略された訳である。また、この大武丸については、いろいろな説があるようだ。佐沼(宮城県登米市)で治水対策をしていた地元の功労者説や、朝廷に対して最後まで戦いを挑んだ地元の勇者説、一方で、追剥や強盗をしていたなどの無頼説、さらには、阿弋流為(あてるい)が大武丸もしくはその弟だったのではないかという説や、平泉町の達谷窟に「悪路王(あくろおう)」という鬼が住みつき、仲間(赤頭・高丸など)とともに悪さをしていたという記録があり、その悪路王の大武丸説など様々な説が存在するが、いずれにしても、歴史ロマンの域をでない。岩手にはまだまだ知



【鬼死骸停留所待合室】



【鬼石】



【鬼死骸村絵図】

らない歴史ロマンが一杯埋まっているようだ。また、鬼死骸村の实在を裏付けるものとして、鬼死骸村絵図（原本は一関市博物館所蔵）が真柴市民センターの玄関横に掲げてある。この絵図は、仙台藩の北部（現在の宮城県北部や岩手県南部の地域）について、元禄年間に仙台藩士の生江助内（なまえすけない）によって作成された村絵図や郡絵図であり、仙台藩の一関藩領も同様に作成された。この絵図が古くなったため、一関藩士の佐藤勇右エ門が作り直して藩に提出した控えであることが、記されている。作成当時鬼死骸村は鬼石を中心に、人口、石高（穀物の生産量）が示してある。鬼石が村の中心に置いてあるという事は、鬼石すなわち大武丸が村人たちの守り神的な存在だったと推測される。東北各地には坂上田村麻呂の功績を称えた遺跡や言い伝えが多く存在するが、我々東北人の



【鬼石の隣の満開の桜】

ルーツかも知れない阿弔流為しかり、大武丸しかり、当時の蝦夷の人達の中央への反抗精神を思うと、何かしら胸が熱くなるのは筆者だけであろうか？それでも、鬼死骸停留所待合室にしばし佇んでいると、ひょっこりと鬼が「こんにちは！」と声をかけてくれるような気分になった時間であった。最後に鬼石のすぐ北側にあった、満開の桜を撮影した。新型コロナウイルスの猛威が続く中、大都市圏では緊急事態宣言が発令され、岩手でも県境を跨ぐ移動自粛が叫ばれている。もう少し我慢の日々が続きそうだ。早く落ち着いた生活ができることをただ願うのみである。



【鬼と熊の注意看板】



【鬼死骸のバス停】

参考資料

令和3年2月2日 岩手日報掲載記事

岩手放送「わがまちバンザイ」 3月10日放送 「一関」
真柴まちづくり協議会作成 パンフレット